

猪苗代湖北岸の鳥類調査報告

2013 年度実施



夏の猪苗代湖北岸 アサザとバン

2014 年 2 月 25 日

日本野鳥の会 会津支部

1. 調査の目的と調査方法

国立公園に指定されている猪苗代湖の北岸には、遊歩道とサイクリング道が整備され、多くの人々に親しまれているところである。北岸の鳥類調査は、平成23年10月から厳冬期を除き、毎月1回程度の頻度で、観察される鳥類の調査記録を実施し、今年度は通期で2年目になる。猪苗代湖北岸は、ヨシ原が湖岸を取り巻く様に带状に広がり、直ぐ外の農耕地の田畑を区切る形で柳類の樹林帯があり、更に小黒川、高橋川及び農業用水路などが湖に注ぐ地形で、広さは約100haと広い面積を占める。北岸の湖は、遠浅で、夏はヒシやアサザなどの水生植物が岸辺の湖面を覆うように生育する。鳥類の生息環境としてみると、水辺の鳥や山野の鳥などの生息に適し、多くの鳥類の生息が見られる。平成15年に北岸の鳥類調査が実施されているが、最近の記録は少ない。一方、猪苗代湖の湖水のCOD値が高くなる等の水環境の悪化が問題となり、水質保全のための施策がとられ、多くの人達の努力がなされている。ヨシ原のヨシの刈り払い、漂着水草の回収、ごみの清掃などが最近毎年実施されている。このような作業の生息環境への影響も考えられるが、大規模な環境改変とならなければ、大きい視点から人為的な自然の攪乱と見ることも出来る。長い期間での鳥類の生息状況の変化を北岸地域の開発や人々の保全活動との係わりの中で、考えて行きたい。今回は、平成24年度の鳥類調査との比較からどのような変化が見られるのかについて、調べる事を目的とし、今後の施策へ調査の結果を活かしてゆきたい。

2. 調査方法

平成24年度と同様の方法で実施した。鳥類の繁殖期と越冬期（非繁殖期）の生息状況が観察される4月から9月と10月から12月の期間について、月に1回以上の頻度で実施した。観察地点を猪苗代湖北岸に7箇所の定点を設置し、10分間のスポットセンサス法及び定点移動時はラインセンサス法での手法で出現鳥類の種と羽数を記録した。定点は、歩いて行け、見通しが良く、等間隔にある事を条件に選定した。調査時間は、鳥類が活発に活動する早朝から午前中（7:00～11:00）とし、双眼鏡・望遠鏡で種を確認した。ヨシキリやヒバリについては、観察した地点を記録用紙の地図上に記し、分布調査の資料とした。湖面上のカモ類は、沖合いのものは、種の区別が難しくなるので、約50m以内のものを観察記録した。天候による観察データのばらつきを抑える為に、観察回数を重ねる事に努めた。

表1 調査地点の概要

地点	地形	植生	
P1	松橋浜	平地 明るい見通し良。入り江状	岸辺は砂地、ヨシ原、フトイあり。低木相多い。
P2	白鳥が浜	平地段丘あり。明るく見通し良。	牛沼川両岸にヨシ原。東に島状ヨシ原。高木少。
Pe	小黒川口	平地 河口 遠浅で見通し良。	河口の西に樹林帯とヨシ原が広がる。
P3	烏帽子浜	平地 明るい。樹林で見通し不良	小黒川と烏帽子浜間にヨシ原。河口にアサザ。
P4	三城潟	平地 見通しは不良。	ヤナギなどの樹林相とヨシ原あり。
P5	高橋川口	平地 入り江状 湖側に島がある。	亜高木層など樹林相あり。ヨシ原少なし。
P6	蟹沢浜	平地 岸辺は砂岩地キャンプ場	ミズナラの他樹林相は少ない。ヨシ原少なし。

鳥類の生息環境は、水辺と山野に分けられ、生息する種の違いが見られる。今回の調査地点をヨシ原や樹林と農耕地などから、類型化が難しい地点もあるが大よそ次の様に整理した。

水辺環境優占地点：P1 P2 Pe P5

山野環境優占地点：P3 P4 P6

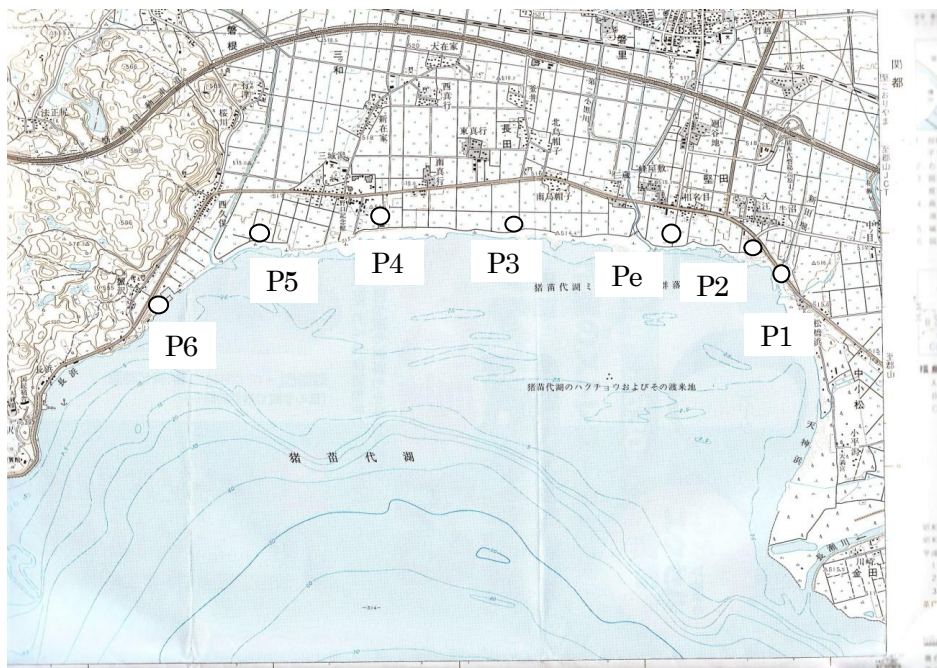
樹林帯があると、湖方向への見通しが失われ、樹林帯の多少が環境に変化を与えている。ヨシ原はこの樹林帯を埋めるように広がっている。

水辺と山野の環境を好む鳥類の一部を科について区分した。鳥類の種の観察から、各地点がどの様に利用されているのかを推測する事ができ、生息環境の保全を考える際の参考になる。

表2 鳥類の区分 (科で表示)

水辺の鳥	カイツブリ	ウ	チドリ	カモメ	セキレイ	ヨシキリ	クイナ	
山野の鳥	ハト	キジ	タカ	カッコウ	ツバメ	ウグイス	モズ	キツツキ
	スズメ	アトリ	ホオジロ	カラス				

図1 調査地点位置 (国土地理院地図 猪苗代から)



調査結果と考察

3.1 H24 調査との比較(確認種 羽数 水辺種と山野種の相違)

地点毎の優占種(羽数の多い種)と出現種について、昨年と同様に記録を整理した。各調査地点で観察された種と羽数を4月から9月の繁殖期と10月から12月の越冬期に分けて集計し、各期に多く生息している種類を抽出した。優占種は観察地点での羽数の多い種を示しているが、群れでいる場合など季節の変動がある。出現種は、観察地点で観察される回数の割合で、ある種にその場所ですれ違う割合と言え、種の生息環境と関係し、地点の環境の多様性を示している。

季節についてみると、繁殖期と越冬期ともに水辺の鳥が65%と85%を占め、猪苗代湖が繁殖期及び越冬期の水辺の鳥の生息地となっていることを示し、特に冬期は湖面が結氷しないので、水辺の鳥にとって重要なところとなっている。主要な生息種は、昨年と同様の結果となっている。ホシハジロ、カルガモ、マガモ、オナガガモ、コハクチョウ、キンクロハジロのカモ類とオオバンが多い。繁殖期は、カワウ、カルガモ、サギ類の他に夏鳥のオオヨシキリ、ツバメが多くなる。オオヨシキリはP2,Pe,P3,P4地点で優占種となり特に多く観察されている。出現種で見ると、繁殖期でオオヨシキリ、カワラヒワ、カルガモ、カワウ、カイツブリなどの夏鳥と留鳥が多く観察され、昨年のカワウ、オオヨシキリ、カルガモ、カワラヒワ、ツバメと似た結果となった。越冬期はカルガモ、ハンボソガラス、カワラヒワ、カワウ、キンクロハジロ、コハクチョウなどの留鳥と冬鳥が多く観察され、昨年のカルガモ、カワウ、ダ

イサギ、アオサギ、コハクチョウ、シジュウカラと比べるとサギ類が少なかった。

繁殖期の地点毎では、P3 と P4 でスズメ、ヒヨドリ、カワラヒワなどの山野の鳥が多く観察される。越冬期では、カモ類が首位であるが、P4 でスズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、シジュウカラが多く、その他の地点の水辺の鳥と違いがある。地点を水辺と山野の優占環境に類型化した区分に、ほぼ似た結果となっている。

確認種一覧から、繁殖期 59 種、越冬期 49 種で多くの種数が観察されて、多様性の豊かさを示している。通期で 68 種となっている。昨年の結果と比べると、繁殖期と越冬期で 2 種と 4 種少なく、通期で 4 種少ない。内訳を見ると、H25 年はハシビロガモ、ホオジロガモ ジョウビタキ セッカ ハヤブサなどが観察されず、ヤマガラ カケス マガン ノビタキなどが観察された。生息数の少ない種などは、観察のバラツキがあるものと思われる。

今回の調査で観察された福島県レッドデータブック記載種は、表 7 に示す 10 種であった。オオタカ、ノスリ等の猛禽類の他は、ヨシゴイ、オオヨシキリ、コヨシキリ、バン等の水辺の種類が観察され、ヨシ原の面積や構造が各々の種の好む状態となっていると考えられ、多様性のある生息環境となっている。

表 3 地点毎の優占種 H25 繁殖期 (4 月から 9 月)

P1	%	P2	%	Pe	%	P3	%	P4	%	P5	%	P6	%	全体	%
カルガモ	22.2	カルガモ	18.0	オオヨシキリ	15.0	オオヨシキリ	39.2	オオヨシキリ	24.5	カワウ	26.9	カワウ	19.4	オオヨシキリ	16.9
オオヨシキリ	13.5	オオヨシキリ	16.1	スズメ	12.2	カルガモ	6.8	ムクドリ	16.3	カルガモ	19.9	キンクロハジロ	11.9	カルガモ	12.2
カイツブリ	12.4	ツバメ	9.7	カワウ	10.0	スズメ	6.0	カワラヒワ	9.8	スズメ	11.1	アオサギ	10.4	カワウ	10.2
カワウ	6.2	カイツブリ	9.4	ゴイサギ	9.5	カワラヒワ	5.2	スズメ	8.3	ハシボソガ	5.1	ムクドリ	9.1	スズメ	7.1
オオバン	4.6	カワウ	8.8	カルガモ	7.2	コヨシキリ	5.2	ツバメ	6.7	カワラヒワ	5.7	カワラヒワ	9.0	ツバメ	5.5
ヒヨドリ	4.2	キンクロハジロ	5.7	ユリカモメ	7.2	ツバメ	4.4	カワウ	4.9	アオサギ	4.1	コハクチョウ	9.0	カワラヒワ	5.2
ツバメ	3.9	カワラヒワ	4.4	ツバメ	4.4	カイツブリ	4.0	アトリ	3.1	ハクセキレイ	3.5	ハシボソガラス	7.5	ムクドリ	5.1
カワラヒワ	2.7	スズメ	4.1	カワラヒワ	4.2	ハシボソガラス	3.6	ヒヨドリ	2.5	オオヨシキリ	3.5	スズメ	6.0	カイツブリ	4.6
スズメ	2.7	オオバン	3.2	オオバン	3.9	ヒバリ	3.2	シジュウカラ	2.5	ムクドリ	3.2	ハクセキレイ	4.5	ゴイサギ	2.7
アオサギ	2.7	アオサギ	1.8	オオヨシガモ	2.6	ムクドリ	2.8	キジバト	2.1	コハクチョウ	2.2	カルガモ	3.0	オオバン	2.5
モズ	1.9	コヨシキリ	1.8	カイツブリ	2.0	トビ	2.4	コムドリ	1.5	オオバン	2.2	ヒヨドリ	1.5	ハシボソガラス	2.0
ムクドリ	1.9	ヒバリ	1.6	ヒバリ	1.9	ハシフトガラス	2.0	トビ	1.2	キジバト	1.9	ホオジロ	1.5	ホオジロ	2.0
コムクドリ	1.9	バン	1.6	バン	1.6	オオバン	2.0	カシラダカ	1.2	ツバメ	1.9	トビ	1.5	アオサギ	1.9
ハクセキレイ	1.9	ムクドリ	1.4	ハクセキレイ	1.3	カワウ	1.6	ハシフトガラス	0.9	ダイサギ	1.9	ヨシゴイ	1.5	キンクロハジロ	1.8
ハシボソガラス	1.9	ダイサギ	0.9	コヨシキリ	1.3	バン	1.2	カイツブリ	0.9	ヒバリ	1.3	ツバメ	1.5	バン	1.7
キンクロハジロ	1.9	ハクセキレイ	0.7	アオサギ	1.3	メジロ	0.8	ハクセキレイ	0.9	カイツブリ	0.9	ウグイス	1.5	コヨシキリ	1.5
コチドリ	1.2	ハシボソガラス	0.7	ハシボソガラス	1.0	ウグイス	0.8	ウグイス	0.6	ヒヨドリ	0.6			ハクセキレイ	1.5
水辺の鳥	73.4		74.7		65.2		64.0		37.7		66.8		61.2		64.6
山野の鳥	26.6		25.3		34.8		36.0		62.3		33.2		38.8		35.4

表 4 地点毎の優占種 H25 越冬期 (10 月から 12 月)

P1	%	P2	%	Pe	%	P3	%	P4	%	P5	%	P6	%	全体	%
ホシハジロ	44.7	ホシハジロ	35.5	カワウ	29.8	コハクチョウ	22.3	オナガガモ	38.7	キンクロハジロ	39.7	カルガモ	38.2	ホシハジロ	23.8
キンクロハジロ	16.4	カルガモ	16.9	スズメ	27.6	カルガモ	17.2	コガモ	16.6	カルガモ	30.3	キンクロハジロ	21.5	カルガモ	15.3
オオバン	10.8	オオバン	16.4	オナガガモ	9.2	スズメ	15.2	スズメ	13.3	コハクチョウ	8.2	コハクチョウ	13.0	キンクロハジロ	13.0
スズガモ	3.3	キンクロハジロ	8.3	カルガモ	8.0	ホシハジロ	8.1	コハクチョウ	5.0	カワウ	7.2	スズガモ	5.1	オオバン	8.6
ヒヨドリ	3.2	マガモ	5.9	カシラダカ	7.7	オナガガモ	8.1	ハシボソガラス	4.4	コガモ	3.6	ホシハジロ	4.1	コハクチョウ	7.2
マガモ	2.7	スズメ	5.8	カワラヒワ	3.1	ヒヨドリ	6.7	ムクドリ	2.8	オナガガモ	2.4	アトリ	3.6	スズメ	6.7
コガモ	2.3	コハクチョウ	5.1	オオバン	2.5	キンクロハジロ	4.0	シジュウカラ	2.2	ハシボソガラス	2.2	ハシボソガラス	3.4	オナガガモ	4.6
コハクチョウ	2.2	カワラヒワ	1.2	コハクチョウ	1.5	オオハクチョウ	3.8	カシラダカ	2.2	オオバン	1.2	カワラヒワ	3.1	カワウ	3.4
カイツブリ	1.9	カンムリカイツブリ	1.0	ハシボソガラス	1.2	ムクドリ	3.4	オオヨシガモ	2.2	スズメ	1.0	スズメ	1.2	マガモ	2.8
カワラヒワ	1.3	カワウ	0.9	バン	0.9	カワラヒワ	2.6	ゴイサギ	1.7	ホオジロ	0.7	マガモ	1.4	ヒヨドリ	1.9
カルガモ	1.0	ヒヨドリ	0.7	オオバン	0.9	オオバン	2.0	ハクセキレイ	1.1	ダイサギ	0.7	オナガガモ	1.2	マガモ	1.7
バン	0.7	ヒバリ	0.4	カイツブリ	0.9	ホオジロ	1.2	ヒヨドリ	1.1	アオサギ	0.7	ハクセキレイ	1.0	カワラヒワ	1.6
カシラダカ	0.6	トビ	0.3	ハクセキレイ	0.9	コガモ	1.2	モズ	1.1	ハシフトガラス	0.7	モズ	0.5	スズガモ	1.2
スズメ	0.5	ハクセキレイ	0.3	ダイサギ	0.9	バン	0.8					ヒヨドリ	0.5	ハシボソガラス	1.0
ハシボソガラス	0.5			ムクドリ	0.9	ハシボソガラス	0.8					ダイサギ	0.5	カシラダカ	0.8
カンムリカイツブリ	0.5			ホオジロ	0.9							カワウ	0.5	カイツブリ	0.7
														ムクドリ	0.6
水辺の鳥	92.6		91.1		56.7		69.0		66.9		94.2		87.4		85.2
山野の鳥	7.4		8.9		43.3		31		33.1		5.8		12.6		14.8

表5 地点毎の出現率 H25 繁殖期 (4月から9月)

P1	%	P2	%	Pe	%	P3	%	P4	%	P5	%	P6	%	全体	%
カイツブリ	81.8	カイツブリ	100	オオヨシキリ	72.7	オオヨシキリ	72.7	オオヨシキリ	72.7	カワウ	90.9	カワウ	54.5	オオヨシキリ	36.1
オオヨシキリ	63.6	カルガモ	90.9	スズメ	72.7	カイツブリ	63.6	スズメ	72.7	カルガモ	81.8	アオサギ	36.4	カワラヒワ	34.5
ヒヨドリ	63.6	ツバメ	72.7	ハクセキレイ	63.6	コヨシキリ	63.6	ムクドリ	63.6	カワラヒワ	54.5	カワラヒワ	36.4	カルガモ	32.8
カワラヒワ	45.5	カワウ	72.7	ツバメ	63.6	カワラヒワ	63.6	カワラヒワ	54.5	ハクセキレイ	45.5	スズメ	27.3	カワウ	31.9
アオサギ	45.5	オオヨシキリ	63.6	カワウ	63.6	ヒバリ	54.5	ツバメ	45.5	ハンボンソガラス	45.5	ハクセキレイ	27.3	カイツブリ	31.1
カルガモ	45.5	ヒバリ	63.6	カルガモ	63.6	ハンボンソガラス	45.5	キジハト	36.4	オオヨシキリ	45.5	ハンボンソガラス	27.3	ツバメ	26.9
バン	45.5	カワラヒワ	63.6	ヒバリ	63.6	トビ	36.4	ヒヨドリ	27.3	ヒバリ	36.4	ヒヨドリ	9.1	ヒバリ	22.7
モズ	36.4	アオサギ	54.5	カワラヒワ	54.5	スズメ	36.4	トビ	27.3	アオサギ	36.4	ホオジロ	9.1	アオサギ	21.0
カワウ	36.4	キンクロハジロ	45.5	カイツブリ	54.5	ムクドリ	36.4	モズ	27.3	ツバメ	27.3	トビ	9.1	ハクセキレイ	20.2
ツバメ	36.4	バン	45.5	バン	54.5	ツバメ	36.4	コムクドリ	27.3	キジハト	27.3	ムクドリ	9.1	ムクドリ	18.5
スズメ	27.3	スズメ	36.4	コヨシキリ	54.5	キジハト	36.4	カルガモ	27.3	ヒヨドリ	18.2	ヨシゴイ	9.1	バン	16.0
ムクドリ	27.3	ダイサギ	36.4	トビ	45.5	カルガモ	36.4	ウグイス	18.2	トビ	18.2	セグロセキレイ	9.1	コヨシキリ	16.0
コムクドリ	27.3	トビ	27.3	ウグイス	45.5	アオゲラ	18.2	ハクセキレイ	18.2	スズメ	18.2	ツバメ	9.1	ウグイス	13.0
ハクセキレイ	27.3	ハクセキレイ	27.3	アオサギ	45.5	カワウ	18.2	ハンボンソガラス	18.2	ダイサギ	18.2	カルガモ	9.1	キジハト	10.9
ホオジロ	18.2	カンムリカイツブリ	27.3	ムクドリ	36.4	バン	18.2	ハンソトガラス	18.2	カイツブリ	18.2	キンクロハジロ	9.1	ダイサギ	8.4
ウグイス	18.2	コヨシキリ	27.3	ハンボンソガラス	36.4	ホオジロ	9.1	カイツブリ	18.2	コハクチョウ	18.2	コハクチョウ	9.1	オオバン	7.6
ヨシゴイ	18.2	ムクドリ	18.2	オオバン	36.4	ノスリ	9.1	ヒバリ	18.2	モズ	9.1	ヒガラ	9.1	コムクドリ	7.6
水辺の鳥 種数	16		20		19		15		10		13		8		29
山野の鳥 種数	16		14		18		18		23		13		9		30

表6 地点毎の出現率 H25 越冬期 (10月から12月)

P1	%	P2	%	Pe	%	P3	%	P4	%	P5	%	P6	%	全体	%
ホシハジロ	66.7	キンクロハジロ	100	カワウ	83.3	カルガモ	83.3	コハクチョウ	50.0	カワウ	66.7	カルガモ	83.3	カルガモ	52.4
ハンボンソガラス	66.7	ホシハジロ	83.3	カンラダカ	50.0	ヒヨドリ	50.0	ハンボンソガラス	50.0	カルガモ	66.7	キンクロハジロ	66.7	ハンボンソガラス	40.5
カワラヒワ	66.7	マガモ	83.3	コハクチョウ	50.0	ホオジロ	50.0	スズメ	50.0	ホオジロ	50.0	ハンボンソガラス	66.7	カワラヒワ	38.1
トビ	50.0	オオバン	83.3	ヒバリ	33.3	スズメ	50.0	モズ	33.3	ハンボンソガラス	50.0	カワラヒワ	50.0	カワウ	38.1
ウグイス	50.0	スズメ	66.7	オオバン	33.3	オナガガモ	33.3	シジュウカラ	33.3	コハクチョウ	50.0	スズメ	50.0	キンクロハジロ	38.1
カワウ	50.0	ハクセキレイ	66.7	カルガモ	33.3	モズ	33.3	ハクセキレイ	33.3	ヒヨドリ	33.3	コハクチョウ	33.3	コハクチョウ	38.1
カンムリカイツブリ	50.0	カンムリカイツブリ	66.7	カイツブリ	33.3	ヒヨドリ	33.3	カワラヒワ	16.7	ダイサギ	33.3	ホシハジロ	33.3	スズメ	35.7
キンクロハジロ	50.0	カルガモ	66.7	ハンボンソガラス	33.3	トビ	16.7	ヒヨドリ	16.7	アオサギ	33.3	ハクセキレイ	33.3	ホオジロ	33.3
オオバン	50.0	カワラヒワ	50	ハクセキレイ	33.3	ムクドリ	16.7	ホオジロ	16.7	ハンソトガラス	33.3	ダイサギ	33.3	ホシハジロ	33.3
ヒヨドリ	33.3	ホオジロ	50	ダイサギ	33.3	ダイサギ	16.7	トビ	16.7	キンクロハジロ	33.3	ヒヨドリ	33.3	オオバン	28.6
ホオジロ	33.3	トビ	50	スズメ	33.3	ハクセキレイ	16.7	ムクドリ	16.7	カワラヒワ	16.7	スズメ	33.3	ハクセキレイ	28.6
カイツブリ	33.3	カワウ	50	ホオジロ	33.3	セグロセキレイ	16.7	コゲラ	16.7	スズメ	16.7	モズ	33.3	ヒヨドリ	23.8
カルガモ	33.3	カイツブリ	50	カワラヒワ	16.7	ハンボンソガラス	16.7	アオゲラ	16.7	コゲラ	16.7	アトリ	33.3	カイツブリ	23.8
スズガモ	33.3	ヒヨドリ	33.3	ヒヨドリ	16.7	ハンソトガラス	16.7	ツクミ	16.7	カイツブリ	16.7	セグロセキレイ	33.3	トビ	19.0
マガモ	33.3	モズ	33.3	ムクドリ	16.7	カイツブリ	16.7	カンラダカ	16.7	コガモ	16.7	カワウ	33.3	マガモ	19.0
オナガガモ	33.3	ダイサギ	33.3	キジハト	16.7	ホシハジロ	16.7	アオサギ	16.7	オナガガモ	16.7	ハンボンソガラス	33.3	オナガガモ	19.0
コハクチョウ	33.3	アオサギ	33.3	オカヨシガモ	16.7	キンクロハジロ	16.7	コサギ	16.7	オオバン	16.7	カイツブリ	33.3	モズ	16.7
水辺の鳥 種数	19		14		14		13		9		10		13		26
山野の鳥 種数	11		10		11		10		18		7		7		23

表7 観察された福島県レッドデータブック記載種

期間 4月から12月

No.	種名	カテゴリー	調査地点
1	オオタカ	絶滅危惧種Ⅰ類	P1 P2
2	ケリ	絶滅危惧種Ⅰ類	P2
3	ヨシゴイ	絶滅危惧種Ⅱ類	P1 P2 Pe P3
4	ノスリ	準絶滅危惧種	P1 Pe P3 P4
5	ハイタカ	準絶滅危惧種	P3
6	ヒバリ	準絶滅危惧種	P1 P2 Pe P3 P4 P5
7	オオヨシキリ	準絶滅危惧種	P1 P2 Pe P3 P4 P5
8	コヨシキリ	準絶滅危惧種	P1 P2 Pe P3 P4
9	バン	準絶滅危惧種	P1 P2 Pe P3 P5
10	オオバン	希少種	P1 P2 Pe P3 P4 P5

表8 調査地点ごとの確認種一覧 H25

種名	科	区分	4月から9月(2013年)									10月から12月(2013年)						総合計		
			P1	P2	Pe	P3	P4	P5	P6	計	P1	P2	Pe	P3	P4	P5	P6		計	
1 カワラヒワ	アトリ	留鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
2 ヒヨドリ	ヒヨドリ	留鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
3 ホオジロ	ホオジロ	留鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
4 トビ	タカ	留鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
5 ノスリ	タカ	留鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
6 スズメ	スズメ	留鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
7 モズ	モズ	留鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
8 シジュウカラ	シジュウカラ	留鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
9 エナガ	エナガ	留鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
10 ムクドリ	ムクドリ	留鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
11 コムクドリ	ムクドリ	夏鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
12 メジロ	メジロ	留鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
13 コゲラ	キツツキ	留鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
14 アオゲラ	キツツキ	留鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
15 アカゲラ	キツツキ	留鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
16 ウグイス	ウグイス	留鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
17 ジョウビタキ	ヒタキ	冬鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
18 ツグミ	ヒタキ	冬鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
19 カシラダカ	ホオジロ	冬鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
20 アトリ	アトリ	冬鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
21 カワセミ	カワセミ	留鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
22 ダイサギ	サギ	留鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
23 チュウサギ	サギ	夏鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
24 アオサギ	サギ	留鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
25 コサギ	サギ	留鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
26 コイサギ	サギ	留鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
27 ヨンゴイ	サギ	夏鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
28 ハクセキレイ	セキレイ	留鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
29 セグロセキレイ	セキレイ	留鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
30 キセキレイ	セキレイ	留鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
31 カウウ	ウ	留鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
32 ツバメ	ツバメ	夏鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
33 イワツバメ	ツバメ	夏鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
34 アマツバメ	アマツバメ	夏鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
35 ハシボソガラス	カラス	留鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
36 ハシブトガラス	カラス	留鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
37 キジバト	ハト	留鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
38 カイツブリ	カイツブリ	留鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
39 カンムリカイツブリ	カイツブリ	冬鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
40 ハシロカイツブリ	カイツブリ	冬鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
41 オカヨシガモ	カモ	冬鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
42 ホシハジロ	カモ	冬鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
43 ヒドリガモ	カモ	冬鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
44 カルガモ	カモ	留鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
45 スズガモ	カモ	冬鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
46 キンクロハジロ	カモ	冬鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
47 コガモ	カモ	冬鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
48 マガモ	カモ	冬鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
49 ハシビロガモ	カモ	冬鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
50 オナガガモ	カモ	冬鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
51 ホオジロガモ	カモ	冬鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
52 カワアイサ	カモ	冬鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
53 ミコアイサ	カモ	冬鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
54 オジドリ	カモ	留鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
55 ノハクチョウ	カモ	冬鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
56 オオハクチョウ	カモ	冬鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
57 オオバン	クイナ	留鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
58 バン	クイナ	留鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
59 ヒンケイ	カモ	冬鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
60 ヒバリ	ヒバリ	夏鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
61 セッカ	ウグイス	夏鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
62 アオジ	ホオジロ	夏鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
63 イカル	アトリ	留鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
64 ハイタカ	タカ	留鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
65 オオタカ	タカ	留鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
66 ツミ	タカ	留鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
67 ハヤブサ	ハヤブサ	留鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
68 オオジュリン	ホオジロ	夏鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
69 オオヨシキリ	ヨシキリ	夏鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
70 コヨシキリ	ヨシキリ	夏鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
71 アンサン	カモメ	旅鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
72 コチドリ	チドリ	夏鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
73 イカルチドリ	チドリ	留鳥・漂鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
74 ビンズイ	セキレイ	留鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
75 シメ	アトリ	冬鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
76 コリカモメ	カモメ	冬鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
77 ヒガラ	シジュウカラ	留鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
78 ヤマガラ	シジュウカラ	留鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
79 カケス	カラス	留鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
80 クイナ	クイナ	留鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
81 ケリ	チドリ	留鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
82 マガン	カモ	冬鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
83 ノビタキ	ヒタキ	夏鳥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
合計	羽数		259	566	698	250	326	316	67	2482	976	1477	326	494	181	416	414	4284	6766	
	留鳥		191	327	449	109	195	285	51	1607	215	643	255	254	58	192	205	1822	3429	
	夏鳥		59	178	166	136	116	22	2	679	0	7	3	1	2	0	0	13	692	
	冬鳥		9	61	83	5	15	9	14	196	761	827	68	239	121	224	209	2449	2645	

表9 年度間の確認種の違い (H24 と H25)

観察した種類			平成25年度	平成24年度
種名	科	区分	観察種	観察種
9 エナガ	エナガ	留鳥	×	○
17 ジョウビタキ	ヒタキ	冬鳥	×	○
30 キセキレイ	セキレイ	留鳥	×	○
34 アマツバメ	アマツバメ	夏鳥	×	○
49 ハシビロガモ	カモ	冬鳥	×	○
51 ホオジロガモ	カモ	冬鳥	×	○
52 カワアイサ	カモ	冬鳥	×	○
53 ミコアイサ	カモ	冬鳥	×	○
61 セッカ	ウグイス	夏鳥	×	○
62 アオジ	ホオジロ	夏鳥	×	○
63 イカル	アトリ	留鳥	×	○
66 ツミ	タカ	留鳥	×	○
67 ハヤブサ	ハヤブサ	留鳥	×	○
71 アジサシ	カモメ	旅鳥	×	○
73 イカルチドリ	チドリ	留鳥・漂鳥	○	×
74 ビンズイ	セキレイ	留鳥	×	×
75 シメ	アトリ	冬鳥	○	×
76 コリカモメ	カモメ	冬鳥	○	×
77 ヒガラ	シジュウカラ	留鳥	○	×
78 ヤマガラ	シジュウカラ	留鳥	○	×
79 カケス	カラス	留鳥	○	×
80 クイナ	クイナ	留鳥	○	×
81 ケリ	チドリ	留鳥	○	×
82 マガン	カモ	冬鳥	○	×
83 ノビタキ	ヒタキ	夏鳥	○	×

3.2 観察種の以前結果との比較

今回の調査で、繁殖期と越冬期の通期 68 種の鳥類を観察した。昨年度平成 24 年と比べて、4 種少ない結果で、留鳥は変わらなかったが、夏鳥と冬鳥で下回った。年度の相違を表 9 に示す。参考資料③の前回調査の平成 15 年 (2003) は、5 月から 9 月までの期間に志田浜から三城潟の間をラインセンサスで実施したもので、船上からの観察も含まれているが、概ね平成 24 年と平成 25 年の調査と類似している。結果と比較すると、平成 15 年調査の確認種は 62 種で、平成 24 年の繁殖期の調査の 61 種、平成 25 年繁殖期は 59 種と漸減となった。詳細をみると共通種が 42 種で約 20 種が異なっている。ケリ、サシバや夏鳥のコサメビタキとシギ類が少なくなっている。他方コムクドリ、セッカ、アオジなど草原を好む種やカムリカイツブリ、チュウサギの大型の種が現れ、カモ類が残っている傾向が見られる。ケリやサシバは農作業の水田の減少との関連が考えられる。シギ類の減少は、遠浅の砂地のあるところを好むので、平成 15 年調査の範囲に天神・志田浜が含まれ、今回は含まれていないので違いが生じたと思われる。さらに湖岸の水草や水位の環境が影響しているのであろうが、今後の観察が必要であろう。H15 年では、カッコウが観察されているが、本調査では観察されなかった。北部水田地帯で観察されているが、湖岸では托卵先のオオヨシキリが生息しているが観察されない。今回 H24 年と H25 年の通年の出現種の記録が得られたので、H8 年の資料と H15 年に補足された資料との比較をすると、76 種が約 70 種に少なくなっている。今回の調査で冬期間の観察が 12 月までと短い、カイツブリ類 大型猛禽類 シギ類 カモメ類などで、観察されなくなった種があり、特に水辺の鳥が少なくなり、草原性を好む種が増えている傾向にあるといえる。湖岸のヨシ原や樹林帯と農耕地との関連があると推測され、約 10 年と短い期間の比較であるが、生息環境の推移が感じられる。

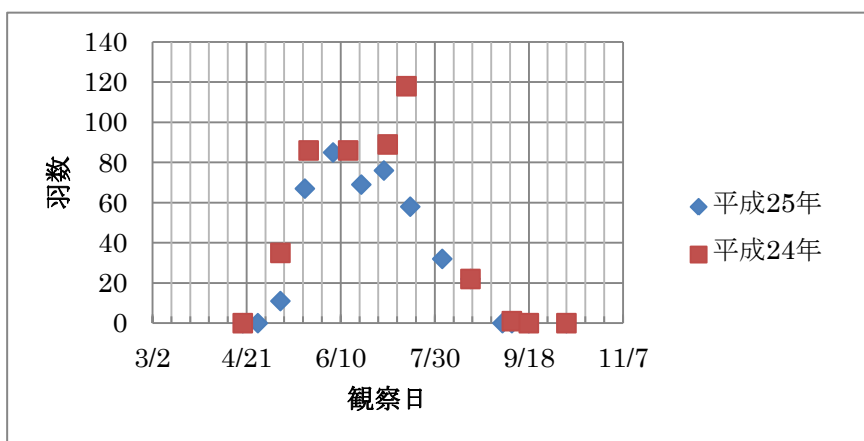
表 10 各調査の確認種 (通期) 平成 15 年以前と平成 25 年までの結果

観察されなくなった種	観察されるようになった種
ミミカイツブリ アカエリカイツブリ	オカヨシガモ ハシビロガモ
トモエガモ オオホシハジロ	ハイタカ ハヤブサ クイナ
オジロワシ オオワシ サシバ	コチドリ イカルチドリ ケリ アジサシ
チョウゲンボウ	ノビタキ セッカ
キジ	エナガ ヒガラ ヤマガラ メジロ
タゲリ イソシギ ソリハシシギ タシギ	アオジ オオジュリン
セグロカモメ ウミネコ コアジサシ	アトリ イカル シメ
カッコウ ホトトギス	コムクドリ
キビタキ エゾヒタキ	カケス

3.3 オオヨシキリの分布およびコヨシキリとの関係

繁殖期の優占種であるオオヨシキリ (*Acrocephalus arundinaceus*) は、夏鳥として海岸河口などの広いヨシ原に渡来する。体の上面はオリーブ黄褐色で、眉斑は白色の体長 18.5cm。オスはヨシ原の少し高い所で、縄張り主張などのギョギョシ ケケンなど特徴のある声で囀る。営巣はヨシ原の中に作り、4~6個の卵を産み、雛は4週間程度で巣立ちする。生息地であるヨシ原のヨシ刈り時期を繁殖期と重ならないように配慮する必要がある。このため、H25年も前年と同様に、生息期間とヨシ原面積について整理した。観察時の生息数は、ヨシ原を広く見通せる位置から、縄張りを主張する囀り個体を記録した。その結果は図2のグラフに示した。北岸での渡来は4月下旬から始まり、繁殖のピークは6月末から7月初で、渡去は9月上旬となっている。H25年は渡来が1週間ほど遅かった。4月が例年より寒く、ツバメなど夏鳥の飛来が遅い状況であった。

図2 北岸のオオヨシキリの生息羽数



飛来数はH24の118羽より、少なく85羽であった。調査地域のヨシ原の面積に大きな違いは無いので、自然変動と見ることが出来るが、今後の推移から考える必要がある。

オオヨシキリと同様の環境にコヨシキリも生息している。今回の記録の観察日と生息羽数(図3)から、5月中旬から飛来し、繁殖活動を始め、最大で6月中旬で10羽であった。8月下旬に渡去する。コヨシキリの地点毎の観察合計数(図4)から、P2、Pe、P3のヨシ原が主要な生息地となっている。

図3 北岸のコヨシキリの生息数

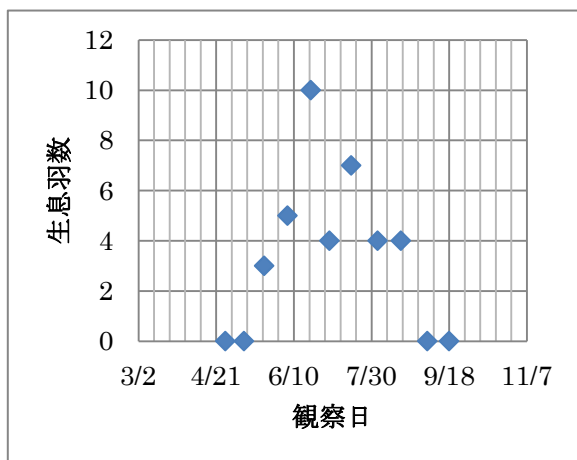
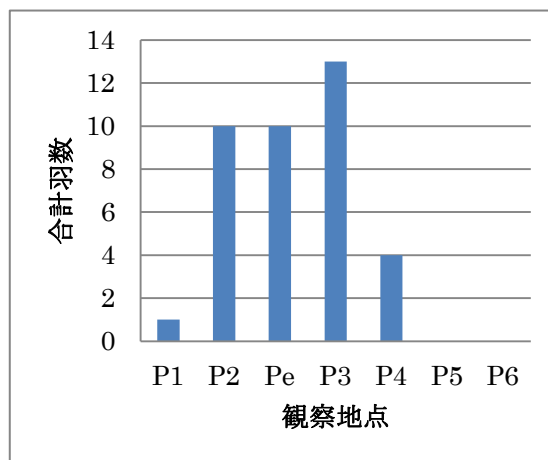


図4 コヨシキリの地点毎の観察羽数



コヨシキリ (*Acrocephalus bistrigiceps*) は、本州中部以北に渡来する夏鳥。体長 13.5cm とオオヨシキリより少し小さいが、概観はよく似ている。緑褐色で眉斑は白く、直ぐ上に黒褐色の線があり、良

く目立つ。囀りは、高い声でケケシケケシ ピピピッカチと賑やかである。アシのある草原に生息する。オオヨシキリより体が小さい事などから、アシ原の棲み分けをしていると考えられる。調査地点の観察箇所を地図上に記し、分布をみると、ヨシ原群落の周辺部にコヨシキリが分布し、低い樹木を利用して。オオヨシキリとの生息域の重なりを避けるため、オオヨシキリ生息域の隙間を利用していると言われ、調査結果からも傾向がみられる。アシ原の低部分をコヨシキリが利用し、上部をオオヨシキリが

図5 P2 から Pe のオオヨシキリとコヨシキリ分布 (2013/6/21)



図6 Pe から P3 のオオヨシキリとコヨシキリ分布 (2013/6/21)



利用する棲み分けがあるとの報告がある。オオヨシキリとコヨシキリが共存できることは、生息に適した多様性のある環境地域があるといえ、環境変化が生息割合の変化に影響すると考えられる。

オオヨシキリの生息密度を求めると、P2～Pe間 7.23 羽/ha、Pe～P3間 6.0 羽/ha、と昨年の平均 10.6 羽/ha と比べ、少なくなっている。観察数が少なかったためであろう。P2～Pe 間は、見通しのある細長いアシの群落部にもかかわらず、密度が高く、生息域としては余裕が無い。ヨシ原のヨシの高さもオオヨシキリの生息環境を決める条件の一つになっているとの報告もあり、複雑であるが今回は面積に単純化した。今後の保全に参考となることを望む。

3.4 ヒバリの分布について

夏鳥のヒバリが P2 から P5 地点で観察されている。大部分は、畑地で、一部水田の畦で観察された。図5と図6に観察点を記した。この2地域では、0.127 羽/ha と 0.06 羽/ha の密度で、これはソバや豆

を栽培していた草地や畑地の面積割合が50%と20%であったことも関係すると思われる。

畑地で1～2羽/haの縄張り面積の古い報告もある。ヒバリは、秋にも観察された。南への渡りの途中と考えられる。猪苗代湖北岸のヒバリは、農耕地を巧みに利用し、毎年繁殖している。畑地や草地の宅地化などの開発で、全国的に生息数が減少し準絶滅危惧種に指定されている。

3.5 カモ類の生息環境

今回のカモ類の観察記録を各地点毎に見ると、地点により優占種となっているカモ類に違いが見られる。Peはオナガガモ カルガモ となっている。P3とP4はカルガモ オナガガモ コガモ コハクチョウ、P5とP6はキンクロハジロ カルガモ スズガモが優占種となっている。

表 11 各地点毎のカモ類の優占順位

P1	P2	Pe	P3	P4	P5	P6
ホシハジロ	ホシハジロ	オナガガモ	コハクチョウ	オナガガモ	キンクロハジロ	カルガモ
キンクロハジロ	カルガモ	カルガモ	カルガモ	コガモ	カルガモ	キンクロハジロ
オオバン	オオバン		ホシハジロ	コハクチョウ	コガモ	コハクチョウ
マガモ	キンクロハジロ		オナガガモ	オカヨシガモ	オナガガモ	スズガモ
コガモ	マガモ		キンクロハジロ			

P1とP2で、ホシハジロ キンクロハジロ やマガモ が優占種であり、他の種類も多い。これらの分布から、P1とP2は、水底採食型と水面採食型のカモが占め、種類も多いがカルガモは少ない。マガモが見られることから、比較的安全な所と推測される。PeからP4は、水面採食型のカモが、休息をしている姿が多い。P5は岸よりにカルガモ、直ぐ沖にキンクロハジロの姿があり、カルガモの姿が濃い。北岸の水辺は、カモ類にとって、採食と休息の重要な地域となっている。水環境からカモ類の生息をみると、貧栄養環境では水面採食カモが優先し、富栄養環境で、水底採食カモが優先するとの報告もあり、今後、詳しい調査が期待される。



写真 13 オオヨシキリ



写真 14 オオヨシキリの巣



写真 15 コヨシキリ



写真 16 ヒバリ

3.6 今後の予定

*今後の取り組み

ヨシ原を利用する種の生息環境の変化について調査し、考えて行きたい。当面はヨシの刈り取り時期や広さなどの判断の参考になれば良いと思われる。ツバメやカワラヒワなどはヨシ原を埒として利用している状況を今まで調査できなかったのが、今後の課題としたい。農耕地など人との係わりが深い生息環境のヒバリなどもいるので、変化も見つめてゆきたい。湖の水環境保全活動の各施策実施により、自然環境が良くなり、希少種を含め、多くの野生生物の生息環境も保全される事を望む。調査することにより、保全のための具体的な施策などを検討してゆきたい。観察に洩れている種もあると思われるので、観察の継続を実施し、多様性豊かな猪苗代湖の自然を見守ってゆきたい。

3. 謝辞

今回の調査に当たり、猪苗代湖・裏磐梯湖沼水環境保全対策推進協議会の「きらめく水のふるさと磐梯」湖美来基金の保全活動支援事業助成を一部受けました。関係各位に感謝申し上げます。更に、調査に携わった日本野鳥の会会津支部の皆さんのご協力と励ましに感謝申し上げます。

4. 注と参考資料

注・・・科名と種名は日本鳥類目録改訂 7 版 (2012) 日本鳥学会に拠る。

- ①「フィールドガイド日本の野鳥」 増補改訂版 高野伸二著
(財)日本野鳥の会発行 (2007年10月)
- ②「レッドデータブック ふくしま I」 福島県編集・発行 (2003年3月)
- ③「猪苗代湖の自然と環境」 猪苗代湖の自然を守る会発行 (2008年4月)
- ④「磐梯山 四季のうつろい」 齊藤・本多・富田著 歴史春秋出版社 (2003年9月)
- ⑤「ふくしまの野鳥」第50回全国野鳥保護のつどい記念誌 福島県森林整備課 (96年5月)
- ⑥「同所性オオヨシキリとコヨシキリの種間関係」 T.Kagawa 日鳥学誌 37:129-144,(1989)
- ⑦「ヒバリの生活史に関する研究」 K.haneda 山階鳥研報 5, No.1 72-84 (1967)
- ⑧ 「鳥類の生活史」羽田健三編 1986 築地書館 東京

猪苗代湖北岸の鳥類調査報告 2013年

発行 2014年2月25日
著作 日本野鳥の会 会津支部
代表 林 克之
連絡先 福島県会津若松市 Tel&Fax 0242-28-9713

本報告の無断複写を禁じます。